

【月夜の夢逢瀬 Side—una】

私を【女の子】として意識するようになつてゐるかな?
「はあ～～……とおーまあ～～」

私は再びテーブルに突つ伏し、盛大な溜息とともに繋して、男性の名前を口にした。

「お疲れ～。ふう、今日も疲れたあ」

壁に掛かったカレンダーに視線を向ければ、【7月】の文字がナデカと記載されている。7月という時期にしては肌寒さを感じるけれど、それでもまだ7月は始まつたばかり。

「はあ、あと3週間ちよつとか……まだ先は長いなあ」

これで何度目の溜息だろう。今日だけでも数えきれないぐらい溜息を吐いてゐるなあ。我ながら、よく我慢できてると思う。けど、まだまだ我慢の日々は今月いつぱいまで続くと思うと、つい、私の口から本音が零れ落ちてしまつ。

「トーマーに会いたいよお——」

次に私がトーマー会えるのは【決戦の日】——8月1日だ。一ヶ月を切つたとはいへ、我慢もそろそろ限界にきてるかも。

自分で決めたことなのに、今すぐにでも会いに行きたくなる。

だって、約二ヶ月前まではほぼ毎日会っていたのに、イッキさんに相談して決心した日から一度もトーマーには会つてはしない。

——私が『寂しい』つて思つてゐるうちに、トーマーも少しは私に会えなくて『寂しい』つて思つてくれてるかな? 少しごりは

背後から聞えてきた声に顔を上げれば、そこには私と同じ和風メイドの格好をした親友のサワが立つていて。ああ、そういえば、サワも上がりの時間だつたけ。

「オツカレサマ……」

「……つて、おわづーちゃん、ジーしたの、ルナ?」

眉根を下げて情けない顔をした私を視界に捉えたらしく、サワが何事が起きたのかと、顔色を変えて駆け寄つて来てくれる。「ううーー、サワあ」

そんなサワの優しさに泣きついでしまつ。

「な、なに? 体調でも悪いの?」

心配気なサワの言葉に首を横に振る。「いや『違つ』と『違へる』私は涙ぐみながら私の【症状】を口にした。

「トーマーが足りないよお～。息でさなびよおー」

「ああ、なんだ。こつもの【トーマーさん欠乏症】ね」

事情を知つてゐるサワは納得顔で私の【症状名】を告げると、呆れた表情をしながら向かひの席へと腰かけた。

「【なんだ】じゃないよ、私に之は深刻な」となんだか…」